

学長定例記者会見要項

日 時： 令和6年12月5日（木） 11：00～11：45
場 所： 法人本部第一会議室（小白川キャンパス法人本部棟3階）

発表事項

1. 令和6年7月山形県北部豪雨災害調査続報～とくに新庄市新田川の氾濫と酒田市北青沢地区の斜面災害について～
2. 世界初 無色透明なX線を遮蔽できる複合材料の開発に成功～山形大学高橋辰宏研究室と弘前大学被ばく医療総合研究所及び保健学研究科の共同研究成果～
3. 健康アプリ「Well-BeingYU」の公開について～山形大学 Well-Being 研究所において開発～
4. 社会共創デジタル学環 アトリエ完成披露式 解体予定の西山形小学校旧校舎から大学へ――再利用で生まれ変わる学びの空間
5. 初の「山形大学応援キャンペーン」を実施～開学75周年の山形大学へご支援をお願いします～
6. 山形大学基金「障がいのある学生等への支援」を新設
7. 山形大学男女共同参画及びダイバーシティ推進賞の受賞者について

お知らせ

1. ニホンジカは哺乳類4種の生息地利用を連鎖的に変化させる～多雪環境における栄養段階を超えた生物間相互作用～
2. 食文化を通じて交流を深めるイベントの開催～餃子を皮から作って食べて友達になろう～

（参 考）

○ 次回の学長定例記者会見（予定）

日 時：令和7年1月16日（木） 11：00～11：45
場 所：法人本部第一会議室（小白川キャンパス法人本部棟3階）

学長定例記者会見（12月5日）発表

1. 令和6年7月山形県北部豪雨災害調査続報

～とくに新庄市新田川の氾濫と酒田市北青沢地区の斜面災害について～

山形大学災害環境科学研究ユニット所長

学術研究院（理学部担当） 教授

もとやま いさお
本山 功

2. 世界初 無色透明なX線を遮蔽できる複合材料の開発に成功～山形大学高橋辰宏研究室と弘前大学被ばく医療総合研究所及び保健学研究科の共同研究成果～

学術研究院 教授（高分子・有機材料分野担当）

有機材料システム研究科 博士後期課程2年 日本学術振興会特別研究員

たかはし たつひろ
高橋 辰宏
とこなみ りょうま
床次 僚真

3. 健康アプリ「Well-BeingYU」の公開について～山形大学 Well-Being 研究所において開発～

学術研究院 教授（公衆衛生学・衛生学）

医学部情報基盤センター 技術専門職員

こんた つねお
今田 恒夫
かとう たつおき
加藤 立隆

4. 社会共創デジタル学環 アトリエ完成披露式 解体予定の西山形小学校旧校舎から大学へ――再利用で生まれ変わる学びの空間

学部等連係課程設置準備室長

人文社会科学部人文社会学科3年

人文社会科学部人文社会学科2年

わたなべ のぶあき
渡邊 信晃
えんどう りお
遠藤 理央
かたぎり ゆうすけ
片桐 悠輔

5. 初の「山形大学応援キャンペーン」を実施～開学75周年の山形大学へご支援をお願いします～

副学長

むらやま ひでき
村山 秀樹

6. 山形大学基金「障がいのある学生等への支援」を新設

副学長

むらやま ひでき
村山 秀樹

7. 山形大学男女共同参画及びダイバーシティ推進賞の受賞者について

理事・副学長 ダイバーシティ推進室長

いとう まちこ
伊藤 真知子

令和6年（2024年）12月5日

令和6年7月山形県北部豪雨災害調査続報

～とくに新庄市新田川の氾濫と酒田市北青沢地区の斜面災害について～

【本件のポイント】

- 令和6年（2024年）7月25日からの大雨による山形県北部における豪雨災害について、12月25～26日に山形大学農学部（鶴岡キャンパス）で開催される東北地域災害科学研究集会において発表を行う。
- 新庄市本合海地区の発災現場の街路樹や電信柱に残された痕跡水位をもとに浸水深を復元した結果、パトカーが流されたのは最大増水時であったと推定される。発災地点から上流3 kmの範囲の氾濫水の流下経路も復元した。
- 酒田市北青沢地区の斜面崩壊の多くは、幼齢林～無立木地で多く、壮齢林地で少ない傾向があり、全体として森林による斜面崩壊の抑制機能が効果的に発揮された可能性がある。



【概要】

令和6年7月下旬の大雨災害のうち夜間に生じた事象については目撃情報などの直接的な情報が限られているため、現場に残された堆積物、漂着物、侵食痕などを手掛かりにして、災害発生時の状況や原因について解析を進めてきた。新庄市本合海地区でパトカーが流された‘横断道路’に関しては、街路樹・電信柱・路面の浸水痕の調査をもとに最大増水時の状態を復元したところ、浸水範囲は約300 m、浸水深は最大85 cm程、パトカーが流された地点の水深は約80 cmと推定された。この値はドライブレコーダーの記録による80 cmという値と一致することから、パトカーが流されたのは最大増水時であったと考えられる。発災地点から上流3 kmの範囲内で生じた3箇所の破堤・決壊によって水田へ流出した氾濫水は結果的に全て‘横断道路’へと流下したとみられるが、決壊が生じた順序については依然として不明である。

【背景】

令和6年7月25日午前から7月26日未明にかけての大雨によって庄内・最上地域を中心に甚大な被害が生じ、3名の命が失われた。山形大学災害環境科学研究ユニットでは7月27日以降現地調査を行い、被災状況の概要について9月の日本地質学会山形大会にて速報を行った。今回の東北地域災害科学研究集会では、それら広域的な調査概要に加えて、とくに新庄市新田川の氾濫と酒田市北青沢地区の斜面災害に関する調査の進捗について報告する。

東北地域災害科学研究集会は、自然災害研究協議会東北地区部会・日本自然災害学会東北支部が主催し、自然災害に関する研究者が参集して年に1回開催されている。山形大学での開催は2019年の小白川キャンパス以来5年ぶりとなる。今回は農学部の菊池俊一准教授がホストとなって、鶴岡キャンパスにて開催される。

【学会発表】

山形大学災害環境科学研究ユニットでは、今回の東北地域災害科学研究集会で次の講演を予定している。講演日は令和6年12月25日（水）～26日（木）。

(1) タイトル：令和6年7月下旬に発生した山形県北部豪雨災害について

講演者：本山 功（山形大・理）・三辻和弥（山形大・工）・熊谷 誠（山形大・地教）・村山良之（山形大・地教）・橋本智雄（中央開発）・佐藤正成（中央開発）・岩田尚能（山形大・理）・加々島慎一（山形大・理）・石垣和恵（山形大・地教）・八木浩司（山形大・地教、深田地質）

(2) タイトル：令和6年7月山形県豪雨における建物・構造物の被害について

講演者：三辻和弥（山形大・工）・三浦篤史（山形大・工）・小國淳浩（山形大・工）・本山 功（山形大・理）

配布先：学長定例記者会見参加報道機関

お問い合わせ

学術研究院教授 本山 功（地質学）／理学部担当（災害環境科学研究ユニット所長）

TEL 023-628-4776 メール i-motoyama@sci.kj.yamagata-u.ac.jp

PRESS RELEASE

令和6年（2024年）12月 5日

世界初 無色透明なX線を遮蔽できる複合材料の開発に成功

～山形大学高橋辰宏研究室と弘前大学被ばく医療総合研究所及び保健学研究科の共同研究成果～

【本件のポイント】

- 山形大学 床次僚真 日本学術振興会特別研究員（DC2）らと、弘前大学被ばく医療総合研究所及び同大保健学研究科は、材料設計と評価解析に関して共同研究を行うことで、無色透明でしかもX線を遮蔽できる複合材料を世界で初めて開発した。
- X線を用いている診断・医療・治療・滅菌・消毒・分析・検査（空港手荷物、鉄筋コンクリート構造物等）・植物（品種改良）・食品（保存）・防護具などで、軽量性に加えて、無色透明性を有することで、安全性と作業性を上げつつ、X線被ばくを防ぐところへの応用が可能である。

【概要】

特性	新技術	従来技術	
		金属酸化物複合体	鉛
X線遮蔽性	○	○	○
軽量性	○	○	×
無色透明性	○	×	×

液体から
固い、柔らかい複合体
まで作製可能

山形大学 床次僚真（とこなみ りょうま）日本学術振興会特別研究員（DC2 有機材料システム研究科 博士後期課程2年生 指導教員：高橋辰宏教授）らと、弘前大学被ばく医療総合研究所及び同大保健学研究科は、材料設計と評価解析に関して共同研究を行うことで、無色透明でしかもX線を遮蔽できる複合材料を世界で初めて開発した。液体から、固い複合体、更には柔らかい複合体まで、そして、生分解、リサイクルもでき、環境にやさしい複合材料を作製できる。国内特許出願（山形大学と弘前大学での共願）をすでに行い、それを基礎として海外でも権利化すべく国際出願（科学技術振興機構JST 知財活用支援事業に採択）も行った。本研究は日本学術振興会及びJKA財団の支援を受けて行っている。研究成果はAmerican Chemical Societyアメリカ化学会の査読付き国際ジャーナル ACS Omega (IF:4.0 <https://doi.org/10.1021/acsomega.4c07904> Ryoma Tokonami et al.)に受理掲載されました。

【背景】

山形大学有機材料システム研究科では高分子・有機材料をベースに幅広い複合材料研究を展開している。一方、弘前大学被ばく医療総合研究所は、放射線総合科学をベースに、計測技術の高度化、環境・生物影響、放射線防護材料などの研究や、福島原子力災害の支援まで広く展開している。床次僚真 日本学術振興会特別研究員(DC2)からのオリジナリティある新しい研究テーマ自体の提案と自由な発想での基礎研究から共同研究をスタートさせてきた。従来実現できていなかった、高いX線遮蔽特性を保持しつつ、無色透明を実現させることで、安全性と作業性を向上させたい医療現場等でのニーズも把握しつつ、特許出願も行い産業応用を視野にいれつつ共同研究を展開させてきた。

山形大学高橋辰宏研究室 <https://tatsuhiro-lab.yz.yamagata-u.ac.jp/>

弘前大学被ばく医療総合研究所 <https://irem.hirosaki-u.ac.jp/>

弘前大学大学院保健学研究科 <https://ghs.hirosaki-u.ac.jp>

お問い合わせ

山形大学 学術研究院 教授（高分子・有機材料分野担当）高橋辰宏
TEL 0238-26-3585 メール effort@yz.yamagata-u.ac.jp
弘前大学被ばく医療総合研究所 兼任教授 細田正洋
TEL 0172-39-5401 メール m_hosoda@hirosaki-u.ac.jp

世界初 無色透明なX線を遮蔽できる複合材料の開発に成功

～山形大学高橋辰宏研究室と弘前大学被ばく医療総合研究所及び保健学研究科の共同研究成果～

発表者(筆頭発明者)

山形大学有機材料システム研究科高橋辰宏研究室

博士後期課程2年

日本学術振興会特別研究員 DC2

床次僚真(とこなみ りょうま)



HIROSAKI
UNIVERSITY



弘前大学被ばく医療連携推進機構

山形大学

高橋辰宏研究室



 **Tatsuhiro
Takahashi Lab.**

高分子を用いた材料設計



弘前大学

被ばく医療総合研究所
保健学研究科



**HIROSAKI
UNIVERSITY**



被ばく医療と原子力防災
評価及び計測

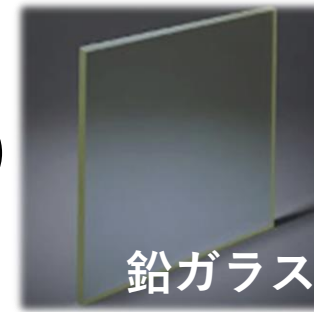
無色透明なX線を遮蔽できる複合材料の開発に成功

研究背景：透明な放射線遮蔽材料

放射線が使用される施設や分野



鉛
(Pb)



代替材料

鉛フリーな放射線遮蔽材料

従来技術

複合材料設計とその特色		透明性	天然資源 生分解性	X線 遮蔽性	無毒	リサイクル	軽さ
鉛		×	×	◎	×	×	×
複合材料		×	×	○	△	×	○
本技術		○	○	◎	○	○	○

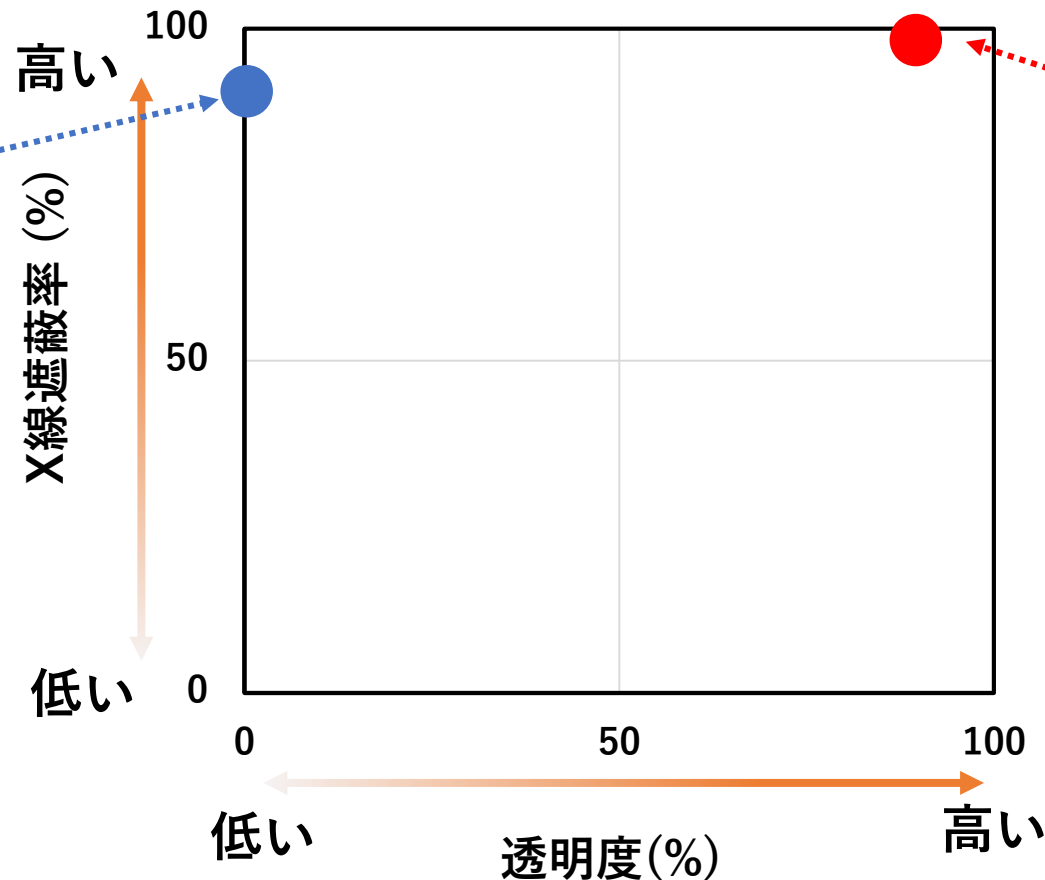


世界初：透明な放射線遮蔽材料

単位体積あたりの金属原子は同じ

新技術：液体として利用可能なX線遮蔽材料

X線遮蔽特性と透明性の比較



従来研究

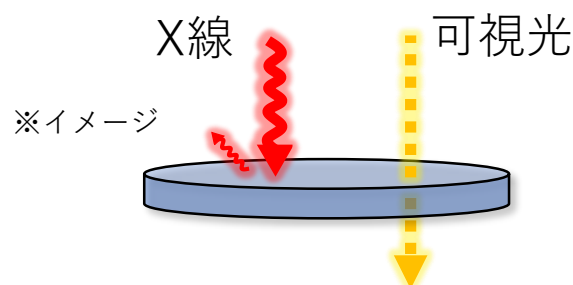
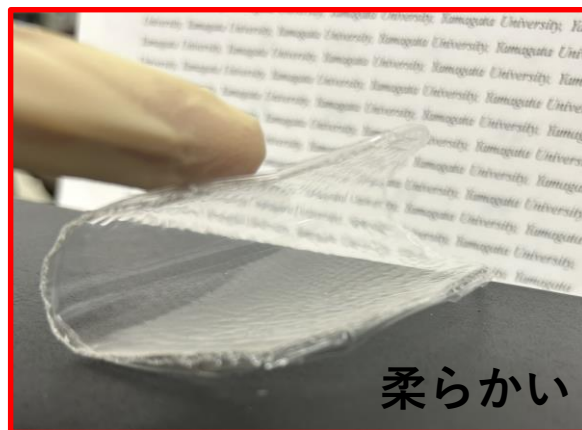
本技術

X線遮蔽特性と透明性を両立

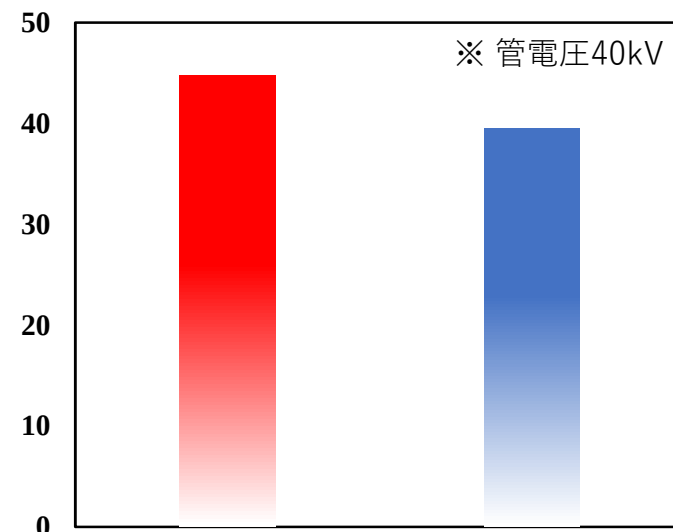


世界初：透明な放射線遮蔽材料

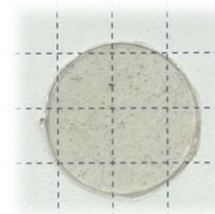
新技術：力学特性と透明性を両立したX線遮蔽複合材料



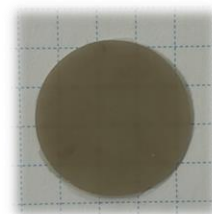
X線遮蔽率



本技術



従来技術



使用用途に合わせて力学特性を変えることができる

国内特許出願済み

海外特許出願済み(科学技術振興機構JST 知財活用支援事業に採択)

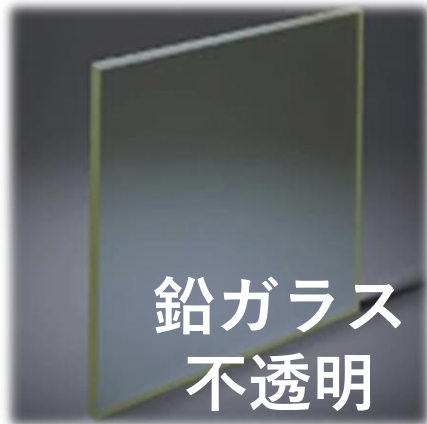


今後の展開：用途

✓ X線が必要とされる分野

診断・医療・治療・滅菌・消毒・分析・検査（空港手荷物、鉄筋コンクリート構造物等）・植物（品種改良）・食品（保存）

応用先



手荷物検査
不透明



グレーのため
医療行為がしにくい



令和6年（2024年）12月5日

健康アプリ「Well-BeingYU」の公開について ～山形大学Well-Being研究所において開発～

【本件のポイント】

- 「山形大学Well-Being研究所」において開発を進めてきた生活習慣改善アプリ「Well-BeingYU」を本年12月から一般の皆様に公開できることとなった。
- 山形コホート研究の成果を基にした疾病等予測機能や個別化したアドバイスによる伴走型の生活習慣改善支援機能が搭載。さらに、本学の医療従事者や専門家による健康ノウハウや最新の研究成果を分かりやすくお伝えするショート動画を閲覧可能。
- 今後、多くの皆様にご使用いただき生活習慣を改善頂くとともに、本アプリを地域の Well-Being（健康・幸福）のための社会インフラとなるよう発展させ、各自治体との協力体制を構築していきたい。



【概要】

山形大学 Well-Being 研究所においては、令和5年度の設置以来、アプリの開発を進めてきたが、この度、基本的な機能の開発が完了したことから、一般公開を行うこととした。

●本アプリのポイント

- ・山形コホート研究の成果を基にした疾病等予測機能が搭載されており、今後5年間のがん・脳卒中・死亡・要介護リスク（参考値）を簡単に確認することができる。
- ・毎日の生活習慣を入力いただければ、その結果を本学医師、教員及びAIが確認の上「習慣サマリー」として個別化したアドバイス、メッセージをお届けすることで、伴走型の生活習慣改善支援を行うことが可能。
- ・使用者限定コンテンツとして、本学の医療従事者や専門家による健康ノウハウや最新の研究成果を分かりやすくお伝えするショート動画を公開。
- ・本アプリはLINEアプリとして開発しており、既にLINEを使用している方は「友達登録」をしていただくだけで簡単に使用可能である。なお、アカウント登録は匿名（ニックネーム）で行っていただくため、個人は特定できない。
- ・吉本興業株式会社が現在推進している「笑いと健康プロジェクト」の一環として作成いただいた、同社所属芸人が出演するオリジナルショート動画を順次公開予定。

【背景】

- ・国民一人ひとりの生活の質を維持し、社会を持続可能なものとするため、健康寿命を大きく延伸させることは喫緊の課題である。
- ・山形大学では20年以上継続してきた山形コホート研究の成果を、地域住民に健康教室、メディアによる広報、自治体への政策提言などで還元してきた。
- ・しかし、これらの方法による介入は、間接的、一方向的、一時的、一般的なものとなりやすく、生活習慣病のリスクが高い人に十分に伝わらず、行動変容につながらないという課題があった。

【今後の展望】

- ・今年度は山形県民の方を対象に運用を行い、令和7年度からは山形県外にまで対象を広げる予定である。
- ・本アプリを各自治体の健康、福祉政策の立案にも活用いただけるように連携を一層進めていく。

お問い合わせ

学術研究院教授 今田恒夫（公衆衛生学・衛生学）

TEL 023-628-5260 メール kkonta@med.id.yamagata-u.ac.jp

飯田キャンパス事務部研究支援課 係長 國分裕基

TEL 023-628-5015 メール yuki-k@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

配布先：学長定例記者会見参加報道機関

※補足説明

1. 山形大学 Well-Being 研究所

・令和5年4月1日から飯田キャンパスに設置。本学において、長年実施してきた「山形コホート研究」の成果を、県民の皆様一人ひとりに個別化して還元し、Well-Being（体と心が健康で、人や社会とのつながりがよい状態）を実現し、健康寿命の延伸につなげることを目的としている。

2. 山形コホート研究

・コホート研究とは、一定期間ある集団を追跡して、病気の発生などの健康状態の変化を調べる研究のこと（例えば、喫煙の集団と非喫煙の集団を一定期間比較し、病気の発生の状況や要因などを明らかにする）。

・山形大学では、「山形コホート研究」として、山形県7市1町の地域住民健診受診者2万人の経年的な健診項目、生活習慣の変化、様々な疾患の発症等の情報を収集しており、その情報を基に、様々な環境要因や遺伝子因子と疾患発症、生命予後との関連について現在も調査、研究を継続している。

（参考）詳細は、Well-Being 研究所ホームページをご覧ください。

URL：<https://www.yu-wellbeing.com/>

山形大学発LINEミニアプリ！

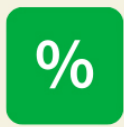


Well-Being YU



スマホで楽しく 健康UP！

ニックネームで
利用OK！



リスク予測

今後5年間のがん・脳卒中、死亡、要介護のリスク（※参考値）がわかる



個別アドバイス

入力した生活習慣について本学医師・教員からメッセージが届く



限定Youtube

プロが教える健康動画！
医療従事者や専門家による健康ノウハウを限定配信

**吉本所属芸人の
限定動画配信！**



AIチャット

色んなキャラクターと雑談！話せば話すほどあなたに合わせた回答に！

使い方は簡単！LINEの友だちに追加して登録するだけ！

STEP 1



QRコードを読み取り
友だちに追加する

STEP 2



メニューのユーザー設定で
情報を入力する

STEP 3



準備完了！色んなメ
ニューをお試しください

※アプリにご入力いただいた情報は山形大学で厳重に保管・管理します

PRESS RELEASE

令和6年（2024年）12月5日

社会共創デジタル学環 アトリエ完成披露式

解体予定の西山形小学校旧校舎から大学へ——再利用で生まれ変わる学びの空間

【本件のポイント】

- 令和6年12月18日（水）に、社会共創デジタル学環のアトリエ（演習室）の完成披露式を開催する。
- 新設する共創アトリエ（演習室）などの学環教育スペースに、学校施設として役割を終えた西山形小学校旧校舎の備品を移設・再利用する。この取り組みは、資源の有効活用を図るだけでなく、地域にとっての貴重な思い出を未来へつなぐ新たな試みである。
- 旧校舎の解体後も、デジタルアーカイブにより建物や教室の様子を画像やVR（仮想現実）で再現。地域住民や同窓生たちが自由に閲覧できる状態とすることで、地域の記憶を保存し、世代を超えたコミュニケーションのきっかけを提供する。

REBORN PROJECT



【概要】

令和7年度に開設する社会共創デジタル学環は、アントレプレナーシップとデジタルソリューションの学びを軸に、学際的な専門知識と論理的思考力（学際的思考力）を身に付けたうえで、実践的な演習と研究カリキュラムにより課題解決型の実践人材を養成する。

今回、学環の演習スペース（共創アトリエ）の改装工事が終了し、完成披露式を開催する。このスペースの特徴は、学生が変革する地域を少しでも感じられるよう、地域の学校施設として役割を終えた西山形小学校旧校舎の備品を移設・再利用することである。次年度に迎える第一期生は、株式会社多田木工製作所の協力のもと、旧校舎の一部の備品を用いた利活用の方法について学び、新たな価値創造を目指す。この取り組みは、資源の有効活用を図るだけでなく、地域にとっての貴重な思い出を未来へつなぐ新たな試みである。

このアトリエは小白川キャンパスの中心に位置し、学生や地域の方に開かれたスペースとして、セミナー、講演会、講習会などが開催できる学びの空間とし、地域と大学をシームレスに繋ぐ。

さらに、西山形小学校旧校舎の解体後も、山形大学の学生サークル「まちの記憶を残し隊」が制作したデジタルアーカイブにより建物や教室の様子を画像やVR（仮想現実）で再現。地域住民や同窓生たちが自由に閲覧できる状態とすることで、地域の記憶を保存し、世代を超えたコミュニケーションのきっかけを提供する。

【社会共創デジタル学環 アトリエ完成披露式】

- 日時： 令和6年12月18日（水） 16：00～16：30（予定）
- 場所： 国立大学法人山形大学小白川キャンパス基盤教育3号館社会共創デジタル学環共創アトリエ
- 出席予定者： 玉手 英利（山形大学学長）、佐藤 孝弘（山形市長）、阿部 恵（株式会社多田木工製作所取締役会長）、出口 毅（山形大学理事）、大西 彰正（山形大学小白川キャンパス長）、渡邊 信晃（山形大学学部等連係課程実施基本組織設置準備室長）、小幡 圭祐（まちの記憶を残し隊最高顧問）
- 内容： 1 開会の辞
2 代表挨拶
3 挨拶・祝辞
4 記念撮影
5 内覧会及びアーカイブデモ
6 閉会の辞

お問い合わせ

国立大学法人山形大学小白川キャンパス事務部総務課学環準備室担当

TEL：023-628-4505 メール：yu-gasoumu@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

PRESS RELEASE

令和6年（2024年）12月5日

初の「山形大学応援キャンペーン」を実施 ～開学75周年の山形大学へご支援をお願いします～

【本件のポイント】

- 開学75周年を迎えた山形大学は、地域における「知の拠点」として、教育・研究・社会共創活動を通じて地域社会の発展に貢献して参りました。
- このたび、この歩みを一層加速し、より良い大学を目指すため、初めて「山形大学基金」を活用した「山形大学応援キャンペーン」を実施します。
- 国立大学に対する運営費交付金の増加が期待できない中で、引き続き十分な教育・研究・社会共創活動を継続していくために、本学へご支援をお願いします。



【概要】

今年開学75周年を迎えた山形大学は、地域における「知の拠点」として、教育・研究・社会共創活動を通じて地域社会の発展に貢献して参りましたが、このたび、この歩みを一層加速し、より良い大学を目指すため、初めて「山形大学基金」を活用した「山形大学応援キャンペーン」を実施いたします（2024年12月9日～2025年1月14日）。

この機会に是非、これからの未来を担う学生や、最先端の教育・研究・診療活動等に励む教職員に思いを馳せていただくと共に、山形大学へ温かいご支援を賜りますよう、よろしくお願いします。

いただいた支援については、下記、「山形大学基金」事業のおいて大切に使用させていただきます。

- ・経済的修学困難学生への支援
- ・障がいのある学生等に対する支援
- ・大学公認サークルへの支援
- ・山形大学運営全般への支援
- ・学部等への支援（〇〇学部（研究科）、〇〇学科（専攻）、〇〇研究室等）
- ・附属学校（園）への支援（GIGAスクール構想／附属幼稚園 創立120周年事業）
- ・やまだ未来へつなぐプロジェクト
（地域の記憶「共創」アーカイブ～まちと人の未来のために～／山形大学医学部創立50周年記念事業）

山形大学応援キャンペーン特設ページ → <https://www.yamagata-u.ac.jp/jp/index.php?cID=8811>

【今後の展望】

国立大学に対する運営費交付金の増加が期待できない中、各国立大学では財源の多様化を図るため、様々な取り組みを実施しています。開学75周年を迎えた山形大学がこれまで同様に教育・研究・社会共創活動を継続していくため、「山形大学基金」は従前以上に重要性が増しており、本学を運営する上でなくてはならない存在となりました。

新型コロナウイルス・人工知能（AI）などの先端技術・ウクライナ・パレスチナ問題といった予測困難で不確実な時代に、山形大学は今後も教育・研究・社会共創活動を発展的に継続して、山形県内にとどまらず、日本・世界へ貢献して参ります。

欲しい未来へ、寄付を贈ろう。



お問い合わせ

総務部総務課社会共創推進事務室（山形大学基金担当）長沼・江口・樋口
TEL 023-628-4497 メール yu-kikin@jm.kj.yamagata-u.ac.jp



みんなで山形大学を盛り上げよう！！



山形大学応援キャンペーン 2024 ～ 2024. 12. 9-2025. 1. 14 ～



山形大学は、地域における「知の拠点」として、研究・教育・社会共創を通じて様々な課題解決に貢献して参りました。この歩みを一層加速し、より良い大学を目指すため、「山形大学応援キャンペーン」を実施いたします。この機会に是非、山形大学に思いを馳せていただくと共に、これからの未来を担う学生・教員へ温かいご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



山形大学応援キャンペーン 2024
特設サイトはこちらから⇒

お問い合わせ

〒990-8560 山形県山形市小白川町一丁目 4-12

国立大学法人山形大学総務部総務課社会共創推進事務室（基金担当） 電話：023-628-4497 E-Mail：yu-kikin@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

PRESS RELEASE



令和6年（2024年）12月5日

障がいのある学生へ、支援をお願いいたします。 ～山形大学基金「障がいのある学生等への支援」を新設～

【本件のポイント】

- 山形大学基金は、このたび従来からの修学支援事業「経済的修学困難学生への支援」に加え、寄付目的「障がいのある学生等への支援」を設置しました。
- 本支援により、障がいのある学生等に対して、安全かつ円滑に学生生活を送れるよう、障がいの状態、特性等に応じた支援を行うために必要な事業を行います。
- 寄付募集は12月1日から行っていますので、ご支援をよろしくお願いいたします。



【概要】

- ・山形大学基金（以下、「基金」という。）は、平成28年の開設以来、6つの寄付目的を設置し、本学における学生支援及び教育研究支援に寄与してきました。修学支援事業としては「経済的修学困難学生への支援」を募金窓口の一つとして設置し、意欲と能力のある学生が希望する教育を受けられるよう支援を行ってきました。
経済的修学困難学生への支援、大学公認学生サークルへの支援、大学運営全般への支援
学部等への支援、附属学校（園）への支援、やまだ未来へつなぐプロジェクト
- ・令和6年度の税制改正により、修学支援事業において障害のある学生等に対して、個々の学生等の障害の状態に応じた合理的な配慮を提供するために必要な事業（経済的理由により修学が困難な学生等を対象とする事業であることの要件を適用しない）が追加されたことにより、本学では7つ目の寄付目的として「障がいのある学生等への支援」を新設しました。
- ・「障がいのある学生等への支援」は、「経済的修学困難学生への支援」と同様に、税額控除または所得控除のいずれか一方の制度を選択できます。（税制上の優遇措置）

【今後の展望】

ご寄付は、合理的配慮の提供に係る授業等を補助する人的支援の強化、支援機器の購入、障がい学生支援スタッフ（YU ハートサポーター）の養成、施設整備・改修等に活用させていただきます。
山形大学の障がい学生への修学支援環境の向上に是非ご協力をお願いいたします。

お問い合わせ

総務部総務課社会共創推進事務室（山形大学基金担当） 樋口、長沼、江口
TEL 023-628-4497 メール yu-kikin@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

令和6年（2024年）12月5日

山形大学男女共同参画及び ダイバーシティ推進賞の受賞者について

【本件のポイント】

- 令和5年度より、男女共同参画及びダイバーシティ推進に貢献した方々を表彰する制度を設けた。
- 2年目である今年度は、2名の教員が受賞することとなった。
- 今後も、大学全体として、男女共同参画及びダイバーシティの推進活動や男女共同参画およびダイバーシティに対する意識の醸成を図っていききたい。

【概要】

本学では、昨年度より男女共同参画及びダイバーシティ推進に貢献した方々を表彰する制度として、「男女共同参画及びダイバーシティ推進賞」を設けている。

今年度は、2名の教員が受賞となった。いずれの受賞者も、研究活動に邁進されてきただけでなく、学内外において女性研究者の裾野拡大に向けた活動してこられた点が評価されての結果となった。

本賞は、男女共同参画及びダイバーシティの推進に貢献した本学の教職員及び教職員で構成する団体を対象としているが、教職員だけでなく、学生を構成員に含めた団体も対象となっている。

今後も、対象となる教職員や団体の活動の更なる一助となるよう、大学全体の男女共同参画及びダイバーシティに対する意識の醸成を図っていききたい。



受賞者 河合 寿子 氏



受賞者 黒谷 玲子 氏

【受賞者】

- 学術研究院（理学部主担当） 河合 寿子 准教授
- 学術研究院（理工学研究科主担当） 黒谷 玲子 教授

【本賞設置の趣旨】

本学では平成21年に、すべての学生と教職員が性別にかかわらず個性と能力とを発揮できる大学づくりを推進するために「山形大学男女共同参画推進宣言」を発表した。また、男女共同参画及びダイバーシティを一層推進し、本学の学生及び教職員が性別・性的指向・性自認等にかかわらずあらゆる活動において個性と能力を発揮でき、かつ、学業・仕事と生活の調和（ワークライフバランス）を実現することを目指して山形大学男女共同参画基本計画（第2次）を定めた。

これに基づき、男女共同参画及びダイバーシティの推進に貢献した本学の教職員及び教職員で構成する団体（教職員と学生を構成員とする団体を含む）を表彰し、男女共同参画社会を目指す取組のなお一層の広がりを図ることを目的に、本賞を設置した。設置は令和5年度であり、今年度は2年目となる。

【審査のプロセス】

本賞では、自薦・他薦を問わず募集を行い、応募者の申請内容・実績により審査を行っている。審査委員会は、ダイバーシティ推進委員会の第1号委員と第2号委員、及び多様性（性別、専門分野、部局、職階）を勘案して委員を構成している。審査結果を学長に内申し、学長はこの内申に基づき、最終的な受賞者を決定することとなっている。

お問い合わせ

総務部総務課ダイバーシティ推進事務室

TEL 023-628-4939 / Mail yu-y-danjo@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

令和6年(2024年)12月5日

山形大学

*詳細は別添の資料をご覧ください。

1. ニホンジカは哺乳類4種の生息地利用を連鎖的に変化させる～多雪環境における栄養段階を超えた生物間相互作用～

2. 食文化を通じて交流を深めるイベントの開催～餃子を皮から作って食べて友達になろう～

山形大学学生チャレンジプロジェクトにより、山形市の学生と留学生が協力し、餃子作りを通じて交流することを目的としています。

日時：令和6年12月12日(木) 16:30～20:00

場所：山形市南部公民館2階調理室

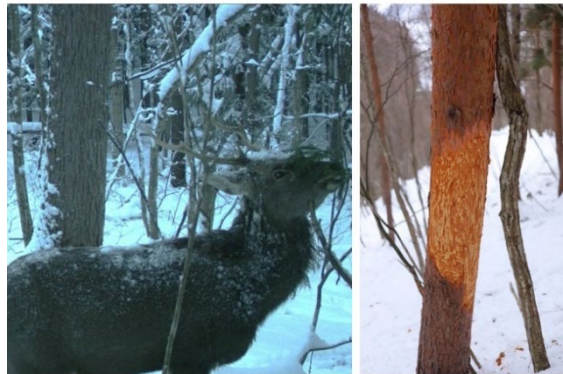
参加費：300円

令和6年（2024年）12月5日

ニホンジカは哺乳類4種の生息地利用を連鎖的に変化させる ～多雪環境における栄養段階を超えた生物間相互作用～

【本件のポイント】

- 多雪地へのシカの分布回復が、他の在来哺乳類の生息地利用に及ぼす影響を痕跡評価により明らかにした
- シカは食性の類似したカモシカとノウサギの生息地利用を制約し、間接的にノウサギの主要な捕食者であるキツネとテンの生息地利用も制約した
- シカの分布回復が起点となる、栄養段階を超えた異種間の生物のかかわり（生物間相互作用）の変化を発見した



【概要】

ニホンジカをはじめとする大型の植食動物の一部は、生態系エンジニア^(注1)と呼ばれ、食物網（食う食われるの連鎖）へ多面的な影響をもたらす可能性がある。本研究では、世界有数の多雪地として知られる福島県奥会津地方において、山スキーを用いて201kmを踏査し、シカの分布回復が多雪環境下で在来哺乳類（カモシカ、ノウサギ、キツネ、テン）におよぼす連鎖的影響を構造方程式モデリング^(注2)により評価した。その結果、シカの採食頻度が高い場所で、食べ物をめぐる競争（搾取型競争^(注3)）により、シカと食性の類似した植食動物（カモシカ、ノウサギ）の生息地利用が制約された。さらに、シカがノウサギの生息地利用を制約した結果、ノウサギの主要な捕食者であるキツネとテンの生息地利用も制約されることが明らかとなった。このことから、大型植食動物が起点となる連鎖的な影響により、食物網が制御される可能性が示唆された。

【掲載雑誌】 *Journal of Zoology* （ロンドン動物学会の発行する国際誌）

【背景】

ニホンジカ（以下、シカ）をはじめとした生態系エンジニアとなる大型植食動物は、植物の採食を介し、食物網へ連鎖的影響を及ぼす可能性が指摘されているが、実証的な研究は国内外ともに極めて少ない。こうした大型植食動物がもたらす影響は、多雪といった生物にとって厳しい環境で発現しやすいことが考えられる。日本では、過去の乱獲や森林破壊により地域絶滅した冷温帯多雪地にシカの分布回復が近年みられている。こうした多雪地へのシカの分布回復が、哺乳類群集に連鎖的な影響をもたらしうるかはこれまで知られていなかった。

【研究手法・研究成果】

シカの多雪環境への分布回復が、哺乳類4種（カモシカ、ノウサギ、キツネ、テン）の生息地利用におよぼす連鎖的影響を明らかにすることを目的に、世界有数の多雪地である奥会津を山スキーで踏査し、雪上に残された対象種の足跡や植物への採食痕を記録することで生息地利用を評価した。この調査は、2022年と2023年の3月に、201kmを踏査することで実施された。解析には、構造方程式モデリング（連鎖的影響を明示できる統計モデル^(注2)）を使用した。主な結果として、①シカの採食圧の高い場所で、冬季の食性がシカと類似した植食性哺乳類であるカモシカとノウサギの生息地利用が制約された。さらに、②シカがノウサギの生息地利用を制約した結果、冬季にノウサギを食物資源として利用するキツネとテンも、シカの採食圧の高い場所で生息地利用の制約を受けていた。このことから、多雪条件下（植物の第一次生産が強度に低下する環境）では、大型植食動物の採食による栄養段階を超えた連鎖的な影響により、食物網が制御される可能性が示唆された。

お問い合わせ

学術研究院教授 江成 広斗（森林動物管理学/農学部主担当）

TEL 0235-28-2925 メール enari@tds1.tr.yamagata-u.ac.jp

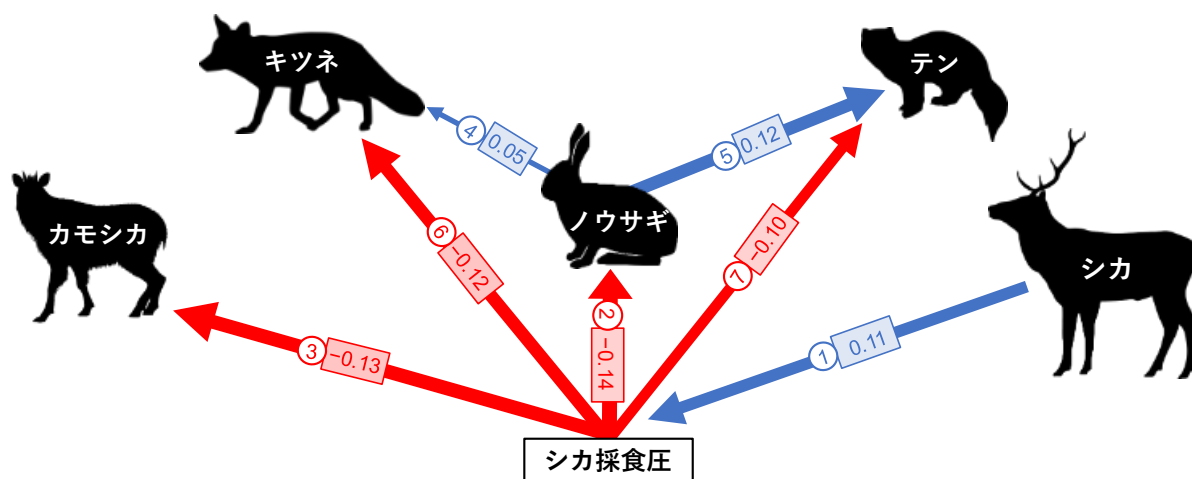


図 1. シカが他の在来哺乳類に及ぼす連鎖的影響。青色の矢印は正の影響、赤色の矢印は負の影響を表している。

図の解釈

1. シカの植物への採食を表す「シカ採食圧」の高い場所で、ノウサギ（矢印②）とカモシカ（矢印③）の生息地利用が減少した。
2. ノウサギの生息地利用の減少により、ノウサギの主要な捕食者であるキツネ（矢印②×④）とテン（矢印②×⑤）も負の影響を受けていた。そのため、「シカ採食圧」の高い場所でキツネ（矢印⑥）とテン（矢印⑦）も生息地利用が減少した。

【今後の展望】

シカは、その採食に伴って生態系を破壊する哺乳類として注目されることが多い。しかし、生態系において、植物の消費者として固有の役割を担ってきた可能性は高い。本研究を通して、多雪地へのシカの分布回復（栄養段階の再野生化^(注4)）により再生された生物間相互作用を検出した。今後も、在来種としてのシカの攪乱を多面的に評価する作業を通して、生態系において果たしうる固有の役割を整理していくことも、本種の保護管理を検討していくうえで重要となるだろう。

※掲載雑誌の詳細

著者：山下純平（山形大学大学院農学研究科修士課程）・赤松萌鈴（株式会社野生動物保護管理事務所）・江成はるか（山形大学農学部客員准教授）・千本木洋介（株式会社 BOULDER）・江成広斗（山形大学教授・責任著者）

タイトル：Cascading effects driven by population recovery of sika deer on habitat use of sympatric mammals under heavy snow conditions

（和訳：多雪環境においてニホンジカの分布回復が同所性哺乳類の生息地利用に及ぼすカスケード効果）

掲載雑誌：Journal of Zoology, DOI: 10.1111/jzo.13233

公開日：2024年11月5日

※用語解説・補足

^(注1) 生態系エンジニア：生息地の物理的な環境を改変させることで、同所的に生息する多くの種に様々な影響を及ぼす生物。

^(注2) 構造方程式モデリング：仮説として設定した複数の変数間の関係を統計的に評価するための手法のこと。特に、変数間の「直接的な影響」だけでなく、「間接的な影響」も評価できるのが特徴である。

^(注3) 搾取型競争：直接的な攻撃ではなく、他方の種が資源を多く利用することで、もう一方の種の利用可能な資源が減少するといった間接的な競争のこと。

^(注4) 栄養段階の再野生化：「再野生化」とは、人による管理を減少させ、自己調整可能な生態系を回復させるアプローチのこと。自己調整可能な生態系の回復において、人為により喪失した捕食者や植食動物など、栄養段階において重要な位置を占める大型哺乳類の回復を「栄養段階の再野生化」という。



PRESS RELEASE

令和6年（2024年）12月5日

【学生チャレンジプロジェクト】 食文化を通じて交流を深めるイベントの開催 ～餃子を皮から作って食べて友達になろう～

【本件のポイント】

- ・山形市の学生と留学生が協力し、餃子作りを通して国際交流を行うイベントを開催。
- ・多文化理解の促進と地域の国際化を図り、地域社会の活性化に貢献。
- ・多文化交流を通じて国際的な視野を広げ、初めて会う人同士でコミュニケーションを取る経験を提供。



【概要】

山形大学の学生チャレンジプロジェクトとして、「食文化を通じて交流を深める会～餃子を皮から作って食べて友達になろう～」というイベントを開催します。このイベントは、国によって食べ方や認識が異なる「餃子」という食文化を通じて、山形に暮らす人たちが国籍、年齢などを越えて交流を深めることを目的としています。

具体的な内容：

日時：12月12日（木）16:30～20:00

場所：山形市南部公民館 2階 調理室

参加費：300円

定員：市内在住の方 10名（所属、年齢など問わず）

持ち物：エプロン

【申し込み方法】

- ①高研究室Instagramアカウント（@yu_koken0109）の固定リンクから申し込み用Googleフォームにアクセス
 - ②下記メールアドレスから問い合わせ
- ※申し込み用GoogleフォームのURLをお送りいたしますのでご記入をお願いいたします。

【期待される効果】

- ・ 多文化理解の促進： 餃子は日本では主におかずとして、中国では主食として食べられているという違いがあるように、国によって認識が異なる「餃子」を皮から作るという食文化体験を通じて、参加者が多文化への理解と交流を深める。
- ・ 地域の国際化： 地域住民と留学生が交流することで、地域における内なる国際化を図る。
- ・ 持続的な国際交流： 日韓の友好などをはじめ、さまざまな国際交流に取り組んできた高研究室を軸に継続的にイベントを開催することで、地域の持続的な国際交流を促進する。

【今後の展望】

持続的な国際交流のために、来年度以降も「たこ焼きパーティー」(日本)、「キンパ作り」(韓国)などを開催することを目指す。

【山形大学学生チャレンジプロジェクトとは】

学生が主体的に活動し、大学や地域との関わりを深める魅力的な企画を募集し、採択された企画に、予算の範囲内で大学が支援を行うプロジェクトです。

お問い合わせ

地域教育文化学部 高研究室（草野）

MAIL：e211272@st.yamagata-u.ac.jp

エンロールメント・マネジメント部学生支援課 齋藤

TEL：023-628-4840 MAIL：yu-gakumu@jm.kj.yamagata-u.ac.jp